Osaka University Knowledge Archive

Title	形容詞の評価的意味と形容詞分類
Author(s)	八亀, 裕美
Citation	阪大日本語研究. 2003, 15, p. 13-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12273
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大日本語研究』15（2003）

形容詞の評価的な意味と形容詞分類

The Evaluative Meaning of Adjectives and Classification of Adjectives

八亀　裕美
YAKAME　Hiromi

キーワード：形容詞、評価的な意味、時間的限定性、特性形容詞、状態形容詞

【要旨】

形容詞研究において重要かつ必要な視点は、「時間的限定性」と「評価」の二つである。本稿では、まず、形容詞の評価的意味について、樋口（2001）を足がかりとして考える。具体的には、樋口（2001）の言語学研究会の文法研究史上での位置づけを確認し、その問題点を指摘・整理する。その上で、方言における形容詞の事実と照合しながら、「時間的限定性」と「評価」の二つを軸とする形容詞分類について提言を行い、今後の形容詞研究の方向を探る。

1. 本稿の目的

形容詞は、動詞と名詞の間にあって、その連続相の中で、swing-categoryとして位置付けられる。これは、日本語だけの問題ではなく、通言語的な事実であることは、Bhat(1994)、Wetzer(1996)、さらに最近ではVogel and Comrie(ed.)(2000)、Givón(2001)等に詳しい。たとえば、Givón(2001:54)では、次のような図が示されている。

【図１】The scale of temporal stability

most stable ……				least stable
tree,	green	sad,	know	work	shoot
noun	adj	adj	verb	verb	verb

現代日本語の形容詞を、このような立場からもう一度観察し、記述することが本研究の最終的な目標である。八亀（2001）では、奥田(1988)の「時間的限定性による述語のタイプ

化」に従って、主に標準語の形容詞述語文の時間的側面、すなわち「時間的限定性の有無」[1]に注目して記述を行った。時間的限定性とは、「出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無」である。これは連続的なもので、上に引用したGivón(2001)のtemporal stabilityと考え方は同じと見てよい。

工藤（2002:49）は、奥田（1988）と上のGivón(2001)の対応を次のようにまとめている（混乱をさけるため、ここでは、工藤の図の左右を逆転して提示する）。

【図２】時間的限定性による述語のタイプ化

most stable ―――――――――――――――――――――――――――― least stable

〈質〉　〈関係〉　〈特性〉　〈存在〉　〈状態〉　〈運動〉

この中で、〈質〉〈関係〉〈特性〉は恒常的本質であり、時間的限定性がない。また、〈状態〉と〈運動〉は、一時的な現象であり、時間的限定性がある。

文のレベルで考えると、基本的に名詞述語文は、もっとも恒常的である。

タロウは秋田犬だ。［名詞述語文：恒常的性質→時間的限定性なし］

形容詞述語文の場合は、名詞に近い恒常性の高いものから、動詞述語文にかなり近い一時的な性質のものまで連続的に存在している。

隣の家の屋根は赤い。［形容詞述語文：恒常的性質→時間的限定性なし］

理解してもらえなくて悲しい。［形容詞述語文：一時的状態→時間的限定性あり］

動詞述語文は基本的には、個別・具体的な出来事を表す。

庭の桜が台風で倒れた。［動詞述語文：個別・具体的出来事→時間的限定性あり］

動詞（述語文）を考える際は、この「時間的限定性」はあまり問題にならないが、形容詞研究においては、重要な意味を持ってくる。ただし、現代日本語の形容詞は、この「時間的限定性」を表す形態論的手段を持っていない。したがって日本語研究では従来あまり注目されてこなかった。

次節で流れを見る言語学研究会の形容詞研究においては、この時間的限定性に注目した形容詞分類を早くから取り入れていた。すなわち、時間的限定性のない「特性（質）形容詞」と時間的限定性のある「状態形容詞」の二つである。八亀(2001)も基本的にこの流れの中にあり、文のレベルにおいて、《特性》・《状態》を表す形容詞述語文を実例に基づいて観察・記述し、「時間的限定性」というカテゴリーが、日本語の形容詞記述にも必要かつ重要な意味をもつことを確認した。しかし、その中で指摘したように、形容詞研究において必要かつ重要なもう一つの視点が「形容詞の評価性」である。

一般に、形容詞における評価というと、「正しい」「よい」「わるい」といった形容詞に限定して用いられることが多いが、八亀(2001)は、すべての形容詞（述語文）に評価性を認める立場にたっている。動詞述語文の場合は、客観的な出来事の描写であるから、次のような場合、ＡさんとＢさんは、違う太郎を見ているか、もしくは、違う時に同じ太郎を見ていると考えられる。

Ａさん：太郎が立った。
Ｂさん：太郎が座った。

しかし、形容詞述語文の場合は、属性（あるいは特徴）の持ち主と属性（特徴）を話し手が評価的に結びつける。従って、次の場合、ＡさんとＢさんが、同時に同じ部屋を見て発言している可能性がある。

Ａさん：この部屋広いね。
Ｂさん：この部屋狭いね。

形容詞にとって、話し手の評価的な関わりは、その本質的な性質である。このように、八亀（2001）では形容詞における「評価」を本質的なものとして指摘しながらも、「形容詞における評価とは何か」という根本的な議論が欠けていた。

樋口（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』（むぎ書房）は、そのタイトルにあるように、形容詞の評価的な意味についての理論的な規定を提示している。そこで、本稿では、まずこの樋口（2001）について、その言語学研究会の形容詞研究史での位置付けを確認すると同時に、内容について筆者の立場から再度読み込むことから始めたい。

前半は、当該論文の書評的なスタイルを取ることになるが、その最終目的は樋口（2001）の単なる批判ではなく、形容詞の評価性についての筆者の考えを示し、実例の分析に活かせる形にまで整理することにある。

そして後半では、科研の調査などで明らかになってきた日本語の諸方言における事実（平成13年度～14年度『方言における動詞の類型論的カテゴリーの総合的研究』研究代表者　工藤真由美）と照合しながら、「時間的限定性」と「評価」を二本軸とする形容詞分類について、現時点での考えを提示する。

2. 樋口（2001）の位置付け

樋口（2001）は、言語学研究会を中心とする言語研究の理論的枠組みに則って議論が進められている。

この枠組みにおける形容詞研究のおおまかな足どりをつかむのに必要だと思われる文献

をまず最初に整理しておくと、次のようになる。

奥田（1988）「述語の意味的なタイプ」（琉球大学講義プリント　未公刊）
荒　（1989）「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学３』
樋口（1996）「形容詞の分類－状態形容詞と質形容詞－」『ことばの科学７』

以上の３本が特に重要である。また、樋口には『教育国語』を中心に形容詞に関する数本の論文がある。

樋口（1986）「形容詞からの派生名詞」『教育国語』84
樋口（1989）「評価的な文」『ことばの科学３』
樋口（1994）「使用における形容詞の＜義務性／偶発性＞」『教育国語』2-14
樋口（1995ａ）「発話の中での形容詞の機能」『教育国語』2-17
樋口（1995ｂ）「形容詞について」『教育国語』2-18

また、樋口（2001）のドラフト段階として、言語学研究会夏合宿の次の二つの報告がある。

樋口（1999）「認識、評価、感情」
樋口（2000）「形容詞の評価的な意味」

以上にあげた一連の論文は、主に形容詞述語文の時間性と評価性についての言語学研究会内での議論の深まりの過程を示してくれる。[2)]

この言語学研究会における形容詞研究が、他の形容詞研究と大きく異なる点は、先にあげた「時間的限定性」への注目というところにある。従来、日本語の形容詞研究においては、「ク形容詞かシク形容詞か」、あるいはその流れを受けて「属性形容詞か感情感覚形容詞か」という分類が主流であったし、さまざまな形容詞分類の提案も、基本的にこの分類の詳細・精密化と考えられる。たしかに精密化は進んでいるが、どちらかと言えば「日本語のため」「形容詞のため」の分類という感を免れない。

一方、言語学研究会では、奥田(1988)の提案する文のタイプに従って、すべての述語文を俯瞰し、その連続的なありさまを念頭においた研究を行っている。ここでは、先に引用した工藤（2002）にしたがって、その連続を簡単に整理しておくと、時間的限定性のない方から次のような順に連続相をなしていると考えている。

《質》→《関係》→《特性》→《存在》→《状態》→《運動》

また、この考え方は、先に見たように、他言語の事実にも沿っており、通言語的な研究への広がりを可能性として秘めている。

このような流れの中で、この樋口（2001）が持つ意味合いは、私見では、次の三点である。

（1）《評価》の定義を明確に行った。

（2）特性形容詞（質形容詞の改称）と状態形容詞における《評価》のありかたの違いを明らかにした。

（3）《評価的な構造》の構成要素として、《評価の主体》《評価の客体》《評価の根拠》《形容詞がさしだす評価そのもの》の４つを認めた。

以下、それぞれのポイントについて、考えていく。

3. 《評価》の定義

樋口（2001）の書き出し６行に展開される《評価》の定義は重要である。

形容詞が人や物の特性をさししめすとき、さししめされる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、なんらかの基準との比較のなかでもとらえられてもいる。この基準と比較することによって、物が他の物との関係のなかでもつ意義があきらかにされたり、それが人間の欲求、利害、目的とかかわってもつ意義があきらかにされたりするのだが、このような、物の意義をあきらかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》とよぶことにする。（43頁）

この定義によって、形容詞における二重構造と評価の位置付けが明らかにされた。

先の節であげた「この部屋広いね」という例で確認をすると、「この部屋広いね」と言うとき、「広い」という特性は、「この部屋」に客観的にそなわっている特徴として差し出される一方で、話し手の中のなんらかの基準との比較のなかでもとらえられている。この場合、おそらく話し手が、「今までの自分の経験」「この部屋を何に使いたいかという目的意識」などを勘案して、「広い」という《評価》を下している。

また、その直後に「すべての形容詞が評価性をもっている（43頁）」ことが確認されている。色や形をさししめす形容詞のように客観性が強いものであっても、「人間の主体的な側面がくいこんでいる。(中略)背後にかくれて、みえないだけのことである」とする扱

いは重要である。このように認めることで、従来「複雑」とされてきた形容詞をめぐる諸問題に解決の方向性が初めて生まれる。このことは、実際に形容詞の用例と格闘した研究者であれば、必ずぶつかる壁を突破する重要な「道具」を差し出している。

この論文以前の樋口の論考では、《評価》について、ここまで明確な定義は実は提示されていなかった。もちろん、樋口（2001）で示された重要な議論のポイントはすでに指摘されていたが、このようなまとまった形で示されたのは初めてである。

樋口は、《評価》について論考するにあたり、樋口（1989）の段階から、ボリフ（1985）を参照している。しかし、樋口（1989）の段階では、「評価的な文」についての定義は、《評価をおこなう主体と評価がむけられる対象とのあいだの、価値的な関係を確認する文である》（1989：181）と記されているが、《評価》そのものの定義は、明示されていない。[3)]

これに対し、樋口（2001）のドラフト段階といえる二つの報告、樋口（1999）と樋口（2000）はかなり新しい段階の《評価》を提示している。どちらも未整理であるが、樋口（2001）への前段階として興味深い。

樋口（1999）では《評価》の定義はまだ未整理で、次のように示されていた。

評価は対象の認識なしには成立しない。認識が物から特徴をとりだしてきて、それについての知識や観念的な対象を形成していく意識的な活動であるとすれば、評価はその特徴のもち主としての物を対象にすえて、それが人間にとって何であるか、その物の価値を表現する。そして、この評価においては、その物の価値があきらかにされると同時に、そのように評価する人間自身の質がそこにあらわになる。（1999：1）

また、樋口（1999）では、主に状態形容詞における「認識・評価・感情」について考えていて、特性形容詞については最後に少しふれられているだけだった。そのため、「感情」の位置付けがまだ未整理だった。樋口（2001）ではこの点が明らかになり、特性形容詞における評価と状態形容詞における評価の違いは次のように述べられている。「特性形容詞では、人間による評価は、ある基準にてらして、それとの比較のなかで物を意味づけるが、状態形容詞では、それは人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす、原因としての対象を意味づけている。」（2001：47）

その結果、樋口（1999）では複雑に見えた「認識・評価・感情」の関係が、「認識・評価」の一次的な関係の上に、評価の中に「比較・感情」の二次的な関係があるという形に

整理された。これは、今後、沖縄の形容詞の分析などで重要な鍵を握ると予想される。

しかし、きれいに整理された反面、整理のためにかえって単純化され、誤解を誘発する可能性も生じてきている。主な問題は次の二点だと思われる。

①時間的限定性と形容詞分類の関係があいまいになり、従来の意味的な「属性形容詞・感情形容詞」の分類に戻ってしまっているように見える。

②状態形容詞の評価が「感情」であることを示す典型例がほとんど＜表出＞になってしまっている。

次の節でこの問題について考えていきたい。

4. 形容詞分類

4. 1. 荒（1989）・樋口(1996)(2001)の形容詞分類

荒（1989)、樋口（1996）の形容詞分類は、「時間的限定性（＝時間的なありか限定）」の有無に注目している。時間的限定性のある「状態形容詞」と時間的限定性のない「質形容詞」の２分類である。

樋口（2001）は「質形容詞」を「特性形容詞」と改称しており（樋口2000より)、これによって、文レベルの《状態》と対応するのが「状態形容詞」、《特性》と対応するのが「特性形容詞」となり、術語の一貫性が保たれるようになった。

今回の樋口の論文の眼目は、この「状態形容詞・特性形容詞」という分類が、評価的な側面でも有効であることを確認することにある。従って、樋口（2001）の45頁で確認されているように、この２分類は、時間的限定性と評価の両面でその意義が確認されるべきものである。しかし、実際は評価の側面を優先したため、一部の形容詞の扱いに混乱が生じている。

まず、樋口(2001)の形容詞分類をここで再度確認しておく。

＜特性形容詞＞（48～49頁）

１．資格づけ的な評価

形	まるい、しかくい
色	あかい、あおい
平らさ	たいらな、へいたんな
透明さ	とうめいな、にごった
量的な特徴	たかい、ひくい、はやい、おそい、わかい、年とった

構造　　ふくざつな、たんじゅんな
抽象性　　ぐたいてきな、ちゅうしょうてきな
活動のし方　いそがしい、ひまな
可能性　　かのうな、ふかのうな
必然性　　とうぜんな、もっともな、あたりまえな
予想と現実
　との不一致　ふしぎな、みょうな、きみょうな、へんな、いがいな
2．資格づけ的な評価＋価値づけ的な評価（《いい／わるい》）
性格　　まじめな、やさしい、がんこな
知性　　りこうな、かしこい、ばかな、まぬけな
現象の様子　じみな、はでな
生理的な特徴　げんきな、けんこうな、びょうじゃくな
美　　げひんな、じょうひんな、みっともない、はしたない
功利　　べんりな、ふべんな、ひつような、ふひつような

＜状態形容詞＞（52頁）
1．直接的な反応（快／不快）
生理的な状態　いたい、かゆい、まぶしい、ねむい
2．直接的な反応（快／不快）＋価値づけ的な評価（いい／わるい）
心理的な状態　うれしい、かなしい、さみしい、つらい、もったいない、
　　うらやましい、ねたましい、しんぱいな、ふあんな、
　　じれったい、なさけない、ざんねんな

まず、＜特性形容詞＞＜状態形容詞＞の２分について、八亀(2001)での論考をふまえて、問題点を整理しておきたい。

4. 2. 八亀（2001）の立場と樋口（2001）との対応

八亀（2001）は、現代日本語の標準語における形容詞述語文についての考察である。形容詞分類については、積極的には扱っていない。時間的限定性について考える際、形容詞が形態論的手段を持たない現代日本語（標準語）では、文レベルでの考察が必要であった。しかし、形容詞述語文を観察してきた立場から、形容詞分類について、時間的限定性の問題と「認識・評価」の二重構造の側面を考慮する方向を提案している。

八亀(2001)の言う「認識レベル」「評価レベル」という用語は誤解を招きやすいのだが、ここでは、「認識レベル＝評価対象と評価のむすびつきという客観的レベル」「評価レベル＝評価主体による評価付けという主観的レベル」と理解していただければ幸いである。先の「この部屋広いね」という例を再度挙げると、部屋に客観的にそなわっている特徴として「広い」という特徴をさしだすのが「認識レベル」であり、話し手がなんらかの基準との比較によって「広い」と《評価》を下すのが「評価レベル」という対応になる。
八亀（2001）の129頁の表を示す。

(前略)すべての形容詞述語文は、「認識レベル」と「評価レベル」の二重構造を持つのだが、属性主が《個》のとき、「認識レベル」と「評価レベル」のそれぞれでunmarkedに《特性》《状態》のどちらを表すか、という点については、語彙的意味とある程度相関がある。図示すると、次の表のようになる（八亀2001：128-129）

【表１】八亀(2001)の形容詞分類

	認識レ《特性》	評価レ《特性》	認識レ《状態》	評価レ《状態》		
A	◎			△	いわゆる属性形容詞の大半	質形容詞
B	△	○			すきだ、きらいだ	
C	○			○	あつい、いたい おもしろい、つまらない、かわいい	状態形容詞
D			◎	△	へんだ、おかしい、いそがしい げんきない、まぶしい、ひもじい	
E	△			◎	いわゆる感情形容詞の大半	

ここで指摘した、A～Eのタイプと、樋口(2001)の形容詞分類を比べてみたい。

まず、おおまかに対応を見ると、この表のうち、認識レベルが前景しやすいものは、樋口（2001）の評価のタイプでは「比較」になる（典型的にはA）。また、認識レベルが前景しやすいものは、樋口（2001）の評価のタイプとしては「感情」となる（典型的にはE）。Cは拮抗する。

このことを確認したうえで、今回の樋口（2001）を見直すと、BとDのタイプが問題となる。

まず、Dが「特性形容詞」の中に組み込まれてしまっている。これは評価の側面を重視

するあまり、時間的限定性の側面が忘れられている（ただし、このＤタイプは樋口（1996）の段階でも質形容詞に入っていて、混乱していた）。

また、Ｂのタイプに関しては、リストからははずされていて、状態形容詞について述べている（５）の中で（55頁）、「好意、嫌悪、憎悪などの感情を表現する形容詞は、対象に対しての、肯定的なあるいは否定的な、人間の、固定化された態度を表現する。この態度は人間の欲求が変わったり、対象がかわったりしないかぎり、過去から現在、そして未来まで持続する、対象にたいする人間の接し方であり、彼の特性である。人間のもとに、特定の対象をつねに肯定的にあるいは否定的に評価するという態度が形成されているとすれば、この種の形容詞は状態形容詞ではなく、特性形容詞である」（樋口2001：55）と説明されている。評価の面（感情）からの記述順序を重視しているので、状態形容詞の記述の部分に差し込まれる形で配置されている。

このように、樋口（2001）は評価が「比較か感情か」という面を前面に出しているため、記述の順序が、結果的に、従来の「属性形容詞か感情形容詞か」という分類に沿っており（先の八亀の表でいうとＡかＥかが分岐になっており）、ここまでの荒や樋口の論の流れを知らない読者には、西尾（1972）などの分類との違いが分かりにくくなってしまう危険性がある。

ここまでマイナス面の指摘ばかりしてきたが、二つの側面を持つＣタイプの分析は樋口（1999）での記述を発展・整理した形で、その両面がどのような形で前景化するかを丹念に用例から帰納している。この部分は、「中間的な部分」こそが「中心的な部分」である形容詞分類の醍醐味が十分に伝わってくる記述である。（58頁からの（６）（７）の記述を参照）

4．3．樋口（2001）の下位分類

樋口（2001）は、さらに特性形容詞をその評価性にしたがって２種類（資格づけ的な評価、資格づけ的な評価＋価値づけ的な評価《いい／わるい》）に分け、状態形容詞も２種類（直接的な反応（快／不快）、直接的な反応（快／不快）＋価値づけ的な評価（いい／わるい）を認めている。

「資格づけ的な評価」と「価値づけ的な評価」の二つの評価タイプがあるという指摘は、形容詞と reference の関係を考えるうえでも、また名詞述語文との連続性を考えるうえでも重要な可能性を秘めているものと思われる。名詞述語文は、基本的に《質》を表す。《質》は《特性》の束であり、クラス分けを行う。

タロウは秋田犬だ。

タロウはオオカミだ。

「資格づけ的な評価」を表す形容詞は、クラス分けに近い性質を持っている。

この図形は四角い。

この図形は丸い。

規定語として働く場合を考えると、その「きめつけ」の役割には、クラス分けへの連続が認められる。

四角い図形／丸い図形

ただ、このことを詳細に論じるためには、definitness を含む reference 全般についてさらに考察を深めなくてはならないだろう。形容詞が規定語としてその特徴的な機能を果たすことも含めて、かなり高いレベルの議論が必要となる。今の筆者にはまだその準備はない。

ここでは、状態形容詞の始めのタイプ、すなわち「直接的な反応」を表す形容詞について、少し議論をしておきたい。

ここには「生理的な状態」を表す「いたい、かゆい、まぶしい、ねむい」などが挙げられており、これらは「もっぱら人間が体験する、一時的な現象をとらえていて、ある刺激にたいしての、主体の、直接的な反応を表現している。」（樋口2001：52）形容詞であるとされている。また、第２のグループとの対比から言うと、これらは「原因としての対象をとらえていない」「もっぱら直接的な反応をいいあらわす」形容詞ということになっている。

しかし、先ほど引用した部分にあるように、これらの形容詞も「ある刺激にたいしての、主体の、直接的な反応を」表現している。確かに樋口（2001）の挙げている用例は、すべて表出なので、「ある刺激＝原因としての対象」が明示されていないが、これらの形容詞であっても、原因となった刺激が言語化され、明示されることは十分考えうることであって（「さっき蚊に刺されたところがかゆい」など）、樋口が指摘するほど明確な違いがあるかどうかは難しいようにも思われる。

たしかに、表出で出やすい形容詞というものは存在する可能性があり、「主に」表出で直接的な反応を表すことがこのタイプの形容詞の特徴であるかもしれないが、「もっぱら」あるいは「原因としての対象をとらえていない」という説明は少し誤解を招くかもしれない。[4)]

59頁～60頁の「熱い・ぬるい・つめたい・暑い・あたたかい・すずしい・さむい」と同様に、二面性をもつ形容詞としての分析が妥当ではなかろうか。そこでは、このように書

かれている。

さらに、状態形容詞のなかには、物の状態も、人間の状態もとらえている形容詞がある。たとえば、「熱い」「ぬるい」「つめたい」「暑い」「あたたかい」「すずしい」「さむい」のような形容詞のように。これらの形容詞はつぎのような、意味的な性格をもっている。つまり、物の状態を知覚するとき、人間は物に現象している状態をとらえると同時に、その状態を相対的にとらえてもいる。しかし、その一方で、その状態は人間が知覚・体験するところの、快／不快にともなわれた、人間のもとに生じる現象でもある。意味的にみて、この種の形容詞はこのような性格をもっていて、じっさいの使用においては、ある刺激にたいする直接的な反応をいいあらわしたり、物の状態をいいあらわしたり、その状態の相対的な意味あいをいいあらわしたりする。

考え方としては、「生理的な状態」を表す形容詞も、「心理的な状態」を表す形容詞と同様に、直接的な反応と価値づけ的な評価をもっているが、表出で用いられることが多く、その場合は、直接的な反応のみを表していると考える方が無理が無いと思われる。[5)]

形容詞のタイプを考える際、記述的な文のなかでの振る舞いをまず考える必要があるのではなかろうか。表出というのは、明らかに一時的なものではあるが、時間的限定性を形態論的にマークする熊本県松橋方言や青森県五戸方言でも、表出（感嘆文）においては、「時間的限定性がある（＝アクチュアル）」ことをマークする形式は用いることができない（村上2001:38、金田1993:132を参照）。[6)] 工藤(2002)も五所川原方言の表出について、次のように報告している。

④一方、〈状態〉の場合は、〈一時的現象〉であることから、２つの形式間の時間的違いはない。「病気だ／病気でら（病気でね／病気でねくてら）」「痛い／痛くてら」「ショックだ／ショックでら」「満開だ／満開でら」はどちらも〈一時的状態〉を表す。（当然「注射は痛い」のような〈一般主体〉の場合は「痛くてら」は使用できない。）しかし、次のような違いがでてくる。
第１に「あ、痛え！」「辛え！」のような〈話し手の表出〉の場合は、「痛くてら／辛くてら」は使用できない。後者は〈話し手の記述・描写〉である。（以下略）（工藤2002:56）

しかし、これは「生理的な状態」を表す形容詞と「心理的な状態」を表す形容詞を分ける必要がない、ということではない。

「生理的な状態」を表す形容詞の方が、「心理的な状態」を表す形容詞よりも動詞に近いことは、日本語において形容詞で表されるこれらの属性が、動詞で表される言語があることからも明らかである。身近な所では八丈方言において動詞で表されることが、金田章宏氏によって報告されている。（工藤編2002参照）

標準語　→八丈方言

眠い　→ネブロワ（動詞）

煙たい→ユブロワ（動詞）

痛い　→ヤメロワ（動詞）

5. 《評価》の４要素

ここでは、樋口（2001）が（７）で明らかにした《評価》の４要素について考える。なかでも《評価の根拠》について、疑問点を明らかにする。現段階では代案を持つわけではないが、何が混乱しているのかを整理しておくのも、最初の段階としては意味を持つであろう。

樋口（2001）は、ボリフ（1985）にしたがって、《評価的な構造》に次の４つ構成要素を認めている。それぞれを箇条書きで抜き出すと次のようになる。（樋口2001：60-61）

①《評価の主体》：評価する人間。
個人であるときもあれば、グループ・社会の人々であるときもある。
文のなかで直接的な表現をうけとっていないばあいでも、かならずどこかに存在する。

②《評価の客体》：評価される客体。
人や物、それらがひきおこす出来事など。

③《評価の根拠》：物の特徴を意味づけるための基準。
人間が物とのたえまない接触のなかでつくりあげてきた、物についての平均的な表象や、人間が体験する、その場かぎりの感情がその基準となる。

④《形容詞がさしだす評価そのもの》：形容詞がもっているところの評価的な意味。

樋口(2001)は、この四つの構成要素からなる《評価的な構造》は「人間による評価的な

判断がいま、その場で下されている、ということがいいあらわされている（61頁）」と規定している。そして、評価する人間の主体性が明示されない場合は、「評価によってみいだされた物の意義が記述されることになる。と同時に、対象にたいする人間の評価的な態度が、個人に、あるいは社会の人びとに固有な質的な特徴として記述されることになる。このような、物と人との、両方の特徴の記述は《評価的な構造》ではなく、《記述的な構造》のなかで行われる（61頁）」としており、さらに《記述的な構造》では、「評価によってみいだされた物の意義が、人間の、一定の評価的な態度につつまれて記述される」としている。

さらに形容詞分類と、この二つの構造は、樋口（2001）の立場では、次のような対応になっている（65頁）。

特性形容詞：もっぱら《記述的な構造》にあらわれる。評価性は《評価的なかまえ》としてあらわれる。
《評価的なかまえ》＝ある対象に固定化された人間の一定の評価。時間にしばられることはない

状態形容詞：もっぱら《評価的な構造》にあらわれる。
そのとき、その場で人間が行う評価。時間にしばられたその場限りの評価である。

樋口（2001）は、状態形容詞の例文が表出に偏っていることは先に指摘した。その限りにおいては、上の対応も妥当であろう。しかし、形容詞の用例を見てきた立場から、そして、方言の形容詞についての報告などを見てきた立場から考えると、次のように整理しなおすべきではないかと考えられる。

＜表出＞の場合→まだ評価的な構造はあらわれてこない。
基本的に感情・感覚の吐露であって、評価対象に評価を付与するという分析的な段階ではない。

＜記述＞の場合→すべての形容詞は《記述的な構造》と《評価的な構造》の二つの構造の絡み合いのなかにあらわれる。
《記述的な構造》は、特徴の持ち主にたいする特徴づけの側面であり、基本的に《特性》をあらわす文になる。時間にしばられない。例外は「いそがしい」など一部の形容詞である。

《評価的な構造》は、評価の主体による評価づけの側面である。
基本的に《状態》をあらわす文になる。時間にしばられる。例外は好悪をあらわす形容詞である。
それ以外の形容詞の評価づけは基本的に一時的感情評価であるが、評価の対象の性質に応じて、次のようなグラデーションがある。

①その場での刺激に対する評価　　最も一時的
②繰り返される出来事に対する評価
③もの名詞《個》に対する評価（個人的）
④もの名詞《個》に対する評価（社会的）
⑤もの名詞《類》に対する評価（個人的）
⑥もの名詞《類》に対する評価（社会的）　　最も一定

基本的に八亀（2001）での考え方に準じているが、これは、たとえ状態形容詞であっても、評価の客体が明示されている場合は（特にもの名詞の場合は）、文レベルで樋口の言う《記述的な構造》の側面が前景化し、客体への特性づけの読みが優位になることを確認しているからである（詳しくは八亀(2001：主に第５章)を参照）。

ただし、樋口（2001）が指摘するように、特性形容詞の評価性の方が「基準」として機能する分、一定化しており、《評価的なかまえ》となっていることは確かであろう。これをきちんと読み解くには、程度性へのより深い理解が要求されているのは疑いないが、今の筆者の力ではまだ読み解くことができない。今後の課題である。

また、評価の４要素のうち、《評価の根拠》がどのようなものであるのかが、樋口（2001）を読み込んでいっても、なかなか明らかにならない。

再度、先の定義を引用しておく。

③《評価の根拠》：物の特徴を意味づけるための基準。
人間が物とのたえまない接触のなかでつくりあげてきた、物についての平均的な表象や、人間が体験する、その場かぎりの感情がその基準となる。

樋口（2001）のなかで、用例に即して《評価の根拠》が示されているのは、「おいしい」の記述において、その二面性を記述している62～63頁の部分であると思われる。ここでは、「この評価的な判断も対象の諸特徴によって条件づけられている。そのばあい、評

価を条件づけている諸特徴はそれを成立させるための根拠としてはたらいている」とされていて、次のような用例があがっている。

「どうだ、その海鼠腸の味は」

「うすじおでおいしいですわ」（その年の冬）

この場合の「うすじおで」というのは《評価の根拠》なのだろうか。前後を読み込んでも完全に理解することはできない。これは「うすじおだ」「おいしい」という二つの「評価そのもの」が並立的に並んでいるようにも思える。

《評価の根拠》が、定義に帰って、「平均的な表象」であるとすれば、次の用例の「近頃の若者にしては」の部分は《評価の根拠》が明示されていると考えていいのだろうか。

太郎は近頃の若者にしてはまじめだ。

だとすれば、次のような場合、「仕事熱心で」「155センチで」の部分もまた《評価の根拠》なのだろうか。

太郎は近頃の若者にしては仕事熱心でまじめだ。

花子は身長155センチでアタッカーにしては背が低い。

まだ、自分なりの説明が完全にできているわけではないが、《関係》をあらわす形容詞述語文を見ていると、「評価行為が行われたことを明示する表現」にはいくつかのタイプがある。樋口（2001）では、それらがすべて《根拠》の中に入れられてしまっているのかもしれない。

ボリフの論文を見ていない段階では結論を急ぐことは危険だが、かなりこの部分に混乱があるらしいことは、同様にボリフを引用して「評価的な判断」について述べている佐藤2001（『ことばの科学10』：86）の次の記述を見ても明らかである（下線は筆者）。

ボリフ1978にしたがって、《評価の構造》にはいりこむ要素として、《評価の主体》《評価の対象》《評価そのもの》《評価の根拠》をみとめるとすれば、この「判断をひきだしてくる前提となるところの、《出来事》」は、かたり手、あるいは登場人物を主体とするところの、《評価の対象》ということになるだろうが、本稿では、評価の《対象》と《根拠》とは、いづれも評価的判断の前提としてはたらく要素とみて、ふたつを区別しないでおく。（佐藤2001：86）

《評価の対象（＝客体）》と《評価の根拠》は同じなのだろうか。なぜ、このような同一視が起こるのだろうか。理由として、次の二つが複合的に働いていると思われる。

①《評価の根拠》＝「ものさしの基準」と「評価のよりどころとなる事実」の混乱

②状態形容詞における《評価の客体》と「評価のよりどころとなる事実」の類似

順に見ていく。

まず、《評価の根拠》は本来定義に従えば「ものさしの基準」であるはずだが、一部「評価のよりどころとなる事実」との混乱があるのではなかろうか。例えば、

このケーキ、この値段にしたら丁寧に作ってあっておいしいよね。

という表現では、

「ものさしの基準」＝「この値段のケーキの標準像」

「評価のよりどころとなる事実」＝「丁寧に作ってあるという事実」

の２つが表れているが、樋口（2001）、佐藤（2001）の例文を見ていると、このような場合、どちらも《評価の根拠》になってしまう可能性があるように思われる。

実際に用例を見ていると、特性形容詞の場合は、《評価の根拠》が定義通り平均像として取り出しやすいのだが、状態形容詞の場合は、先ほどの定義でいえば、「人間が体験する、その場かぎりの感情」が基準となるということで、取り出しにくい。

さらに、状態形容詞は、樋口(2001:47)にあるように、「人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす、原因としての対象を意味づけている」ことから、《評価の客体》と「評価のよりどころとなる事実」が類似してくる。これについては、節を改めて少し整理したい。

6. 《評価の客体》のタイプと形容詞分類の対応

最初に整理したように、樋口(2001)の眼目は、すでに時間的限定性との関連では有効であることが確認されている「状態形容詞」「特性形容詞」２分類が、評価の面でも有効であることを確認することにある。

その関係は、47頁で最初に次のように概観されている。

ごく簡単にいえば、特性形容詞と状態形容詞とでは、評価のし方はつぎのようにことなっている。特性形容詞では、人による評価は、ある基準にてらして、それとの比較のなかで物を意味づけるが、状態形容詞では、それは人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす、原因としての対象を意味づけている。

ここで注目したいのは、上に傍線部（筆者付す）で示したように、特性形容詞と状態形容詞では、《評価の客体》のタイプが異なるという事実である。

特性形容詞では、《評価の客体》は具体的事物であり、基本的に評価の側面は背景化し、

《記述的な構造》が前景化する。そこでは《評価の客体》は《特徴の持ち主》であり、基本的に「～は」で表れる。

彼はやさしい。

この家の壁は白い。

これに対して、状態形容詞では、《評価の客体》は評価の契機となった事態・事象であり、因果関係として、なかどめ・従属文の内容としてあらわれることが多い。

下の例文の場合、「一日あなたと過ごせて」「もっと仕事をしたいのにさせてもらえなくて」という事態・事象が評価の契機となっており、《評価の客体》である。

八亀(2001)では、これらを「属性主」として、先ほどのタイプの「彼は」「この家の壁は」と同等に扱った（八亀2001:34など）。その段階では、《評価》についての考察が浅かったため、混乱を招いた。樋口(2001)によって、そのどちらもが《評価の客体》として統一的にとらえることができることが確認された。

一日あなたと過ごせて楽しかった。

もっと仕事をしたいのにさせてもらえなくてつらい。

このように考えると、先ほどの4．2．でみた樋口分類の混乱している部分を解きほぐすことができる可能性がある。

すなわち、Bグループの「すきだ／きらいだ」は、特性形容詞でありながら、《評価の構造》が前景化しており、扱いに困る。しかし、その《評価の客体》に注目してみると、具体的事物が表れる。これは特性形容詞の特徴である。

この歌、好きよ。

鳥のレバーって嫌い。

また、Dグループの「いそがしい／あわただしい」は、《評価の客体》が評価の契機となった事態・事象であり、因果関係として、なかどめ・従属文の内容として表れることが多い。これは、状態形容詞の特性である。

完全週休二日になって、かえっていそがしいよ。

急な客が来てしまったから、あわただしかった。

こうしてみてくると、「特性形容詞」「状態形容詞」という形容詞分類と「評価」の対応という点でいうと、《評価の客体》のタイプが異なる、という点に注目する必要があるのではないかと思われる。

以上、《評価の構造》の４つの要素と形容詞分類の関係についてみてきた。

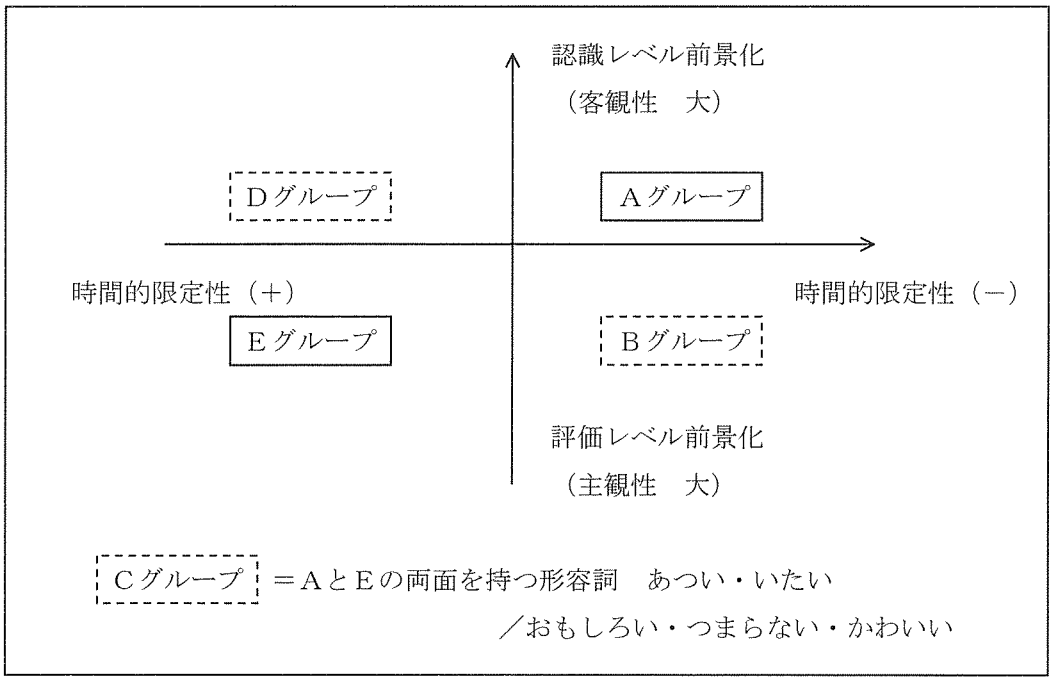
7. 形容詞分類再考

7. 1. 形容詞分類の提案

ここまでの考察を元に、形容詞分類について、再度整理を行っていきたい。「時間的限定性」と「評価」の両方を加味した分類とはどのような形になるのだろうか。

すでにGivón(2001)なども触れるように、時間的限定性はグラデーションを持っている。また、ここまでみてきたように、すべての形容詞（述語文）は評価性を持っており、その前景化の度合いが異なっている。そこで、次に示すように、「時間的限定性」と「評価」を軸とした図式化を考えると、先に４で示した八亀（2001）の表は、次の下の【図３】のように整理することができる。

【図３】時間的限定性と評価を軸とする形容詞分類



グループ名は、先にあげた、八亀(2001)のグループ名に合わせている。単純に言うと、従来の「属性形容詞」の大半がＡグループ、従来の「感情形容詞」の大半がＥグループに属する。この二つのグループに属する形容詞が多い。Ｂ・Ｃ・Ｄに属する形容詞は限られている。

それぞれのグループの特徴を、樋口(2001)の用例を用いて簡単に記述しておく。ただ、

それぞれのグループがその象限の意味しか表さないというのではない。文レベルでは、すべての形容詞述語文は、八亀(2001)の用語でいえば「認識／評価」の二つの側面、この論文で確認してきた言い方でいうと、《記述的な構造》と《評価的な構造》の二つの側面を有しており、ここでグループ分けの材料として用いるのは、八亀（2001）の用語でいうと、《個》が属性の持ち主の場合に、unmarked に表す意味を基本にしている。

時間的限定性や、話し手の主体性の有無を形態論的にマークする手段を持たない現代日本語の標準語は、主語の性格や、副詞の支えによって、《特性》を表す文から《状態》を表す文にまた、その逆の方向に移行する。その詳細については、八亀（2001）を参照していただきたい。

Aグループ

特性形容詞（時間的限定性　なし）

いわゆる「属性形容詞」の大半。

基本的に《記述的な構造》が前景化する。

評価主体はふつう明示されない。

（話し手）	「おとうちゃまのおてて　大きいね」		
《語り手》	《特徴の持ち主》	《特徴》	（前景化）
《評価の主体》	《評価の客体》	《評価そのもの》	

Bグループ

特性形容詞（時間的限定性　なし）

「すきだ」「きらいだ」など話し手の好悪を表す。

基本的に《評価的な構造》が前景化する。

評価主体はふつう明示されないが、個人的な好悪であることを示したい場合は出る。

（話し手）	「冬の川って	好きよ」	
《評価の主体》	《評価の客体》	《評価そのもの》	（前景化）
《語り手》	《特徴の持ち主》	《特徴》	

Cグループ

特性形容詞と状態形容詞の両側面を持つ

あつい・いたい・おいしい／おもしろい・つまらない・かわいい

《評価的な構造》と《記述的な構造》が拮抗する。

評価主体はふつう明示されないが、明示されると《評価的な構造》が前景化する。

倒置されて、形容詞が文頭に出ると、＜表出＞に近づく。

（話し手）「おばさん、この水、とても冷たくてうまいわねえ‥‥」

《評価の主体》　《評価の客体》　《評価そのもの》

《語り手》　《特徴の持ち主》　《特徴》

（話し手）　「うまいな、　このカニ」

《評価の主体》　《評価そのもの》　《評価の客体》　（前景化）

《語り手》　《特徴》　《特徴の持ち主》

Dグループ

状態形容詞（時間的限定性　あり）

いそがしい・あわただしい／真っ赤だ・真っ白だ

《記述的な構造》が前景化する。

評価主体はふつう明示されない。

（話し手）　「完全週休二日になって　かえって忙しいよ」

《語り手》　《特徴の持ち主》　《特徴》　（前景化）

《評価の主体》　《評価の客体》　《評価そのもの》

Eグループ

状態形容詞（時間的限定性　あり）

いわゆる「感情形容詞の大半」

《評価的な構造》が前景化する。

評価主体はふつう明示されない。明示すると主観性が強く感じられる。

《評価の客体》が明示されないことがあり、その方が主観性が強く感じられる。

倒置されて、形容詞が文頭に出ると、＜表出＞に近づく。

（話し手）「花輪先生とランデブーなんですってね。うらやましいなァ」

《評価の主体》　《評価の客体》　《評価そのもの》　（前景化）
《語り手》　《特徴の持ち主》　《特徴》

（話し手）　「はずかしいわ、　こんな手。」
《評価の主体》　《評価そのもの》　《評価の客体》　（前景化）
《語り手》　《特徴》　《特徴の持ち主》

次の節では、この形容詞分類の有効性について、日本語の諸方言の事実と照らしながら少し触れておきたい。

7. 2. 日本語の諸方言と形容詞分類

この節では、先に示した形容詞分類の図式と、日本語の諸方言の対応について簡単に触れ、この分類の有効性を提示しておきたい。

日本語の標準語では、形容詞は形態論的な形に関してはpoorで、時間的限定性や評価の側面を明示する形態論的手段を持たない。主語のタイプ、「～は」を用いるか「～が」を用いるか、副詞の支えなどによって、表している。したがって、先に示した分類も極めて恣意的なものとしてとらえられる。

しかし、諸言語の形容詞（もしくはproperty expression）は、さまざまな形態論的な手段で時間的限定性や評価についてマークする手段を持っている。また、さらに、日本語の諸方言の中にも形態論的な手段を持っているものがある。

日本語の方言の形容詞に関するこのような視点からの調査は、まだ始まったばかりであり、十分な記述をすることはできないが、今、分かっている段階で簡単に紹介しておきたい。詳しい調査報告はまた稿を改めて行う。

ここでは、現在まで報告されている村上(2001)・(2002)、八亀(2002)、工藤(2002)、工藤編(2002)などから一部を紹介するに留まる。

（1）松橋（熊本県）方言の形容詞の「～カリヨル形」

村上（2001）、工藤(2002)によると、年代が下がると衰退の方向にはあるが、当該方言では、形容詞に「～ヨル」の形があり（動詞のprogressiveと同じ形）、時間的限定性があることを表す。

時間的限定性「なし」→「あり」
シロカ　→　シロカリヨル
（いつも白い）　（今だけ白い／白いことを今感じている）

花子ん顔（ン、ハ）、白か。［花子の顔はいつも白い　恒常的特性］

花子ん顔（ン、ハ）、白かりよる。［花子の顔が今だけ白い　一時的状態］

また、興味深いのは、「キョーワ　サンカ（今日は寒い）」と「キョーワ　サンカリヨル」を比べると、前者より後者の方が「現在その外的状態を話し手が直接強く実感している」ことを表しているようである、という指摘がある。（村上2001:38）

（2）五所川原の形容詞の形容詞の「～テラ形」

八亀（2002）に簡単に報告したが、青森津軽方言（南部方言でも同様）にも、形容詞に動詞の継続相に相当する形式があり、時間的限定性があることを表す。工藤(2002)にも記述がある。

熊本県松橋では、年代が下がると衰退の方向にあったが、青森ではまだまだ生産的であり、若い世代でも活発に用いている。

時間的限定性「なし」→「あり」

元気ダ　　→　元気デラ

（いつも元気だ）　（今だけ元気だ／元気であることを今感じている）

太郎（φ、ハ）、元気だ。［太郎はいつも元気だ　恒常的特性］

太郎（φ、ハ）、元気でら。［太郎は今は元気だ　一時的状態］

また、この方言で注目されるのは、名詞述語文にもこの形があり、同じく時間的限定性があることを表す（八亀2002:132)。従って、次のような区別が形態論的に可能である。

田中さん駅長だ。　　［職業として駅長をしている　恒常的特性］

田中さん駅長でら。　　［本職は別で、一日駅長をしている　一時的状態］

この、（1）（2）から、松橋方言・五所川原方言は、「時間的限定性の有無」を形態論的にマークする手段を持っており、先ほどの【図３】でいうと、Ｙ軸を基準にその左右で形が異なるといえるだろう。

すなわち、Ａグループの形容詞の「～カリヨル形」や「～テラ形」は、ＤもしくはＥグループへと移行する。すなわち、客観的に「一時的な逸脱状態」である（＝Ｄ）ことを表したり（いつもは青いのに今だけ赤い）、あるいは、主観的に評価の主体による「一時的感情評価」が行われたことを明示する（＝Ｅ）ことになる（赤いということを感じた）。Ｃグループの場合は、評価の主体による「一時的感情評価」の側面が明示され、Ｅグループへと移行する（先ほどの松橋方言の「サンカ」と「サンカリヨル」との比較を参照）。

次に、評価の側面が形態論的にマークされる方言をみてみたい。

（3）松橋（熊本県）の形容詞の「～シャシトル（ヨル）形」

村上(2002)、工藤(2002)によると、松橋方言では、形容詞に「～シャシトル」という形

があり、「＜評価主体＞が＜評価対象＞を＜評価＞していることを＜話し手が目撃している＞」ことを表す。

（着にくそうにしているのを見て）アンコワ　コンフクバ　コマシャシトル。

＜話し手が目撃＞　　＜評価主体＞＜評価対象＞　＜評価＞

小さすぎて困っている

「認識（客観）」　→「評価（主観）」

アカカ　→　アカシャシトル

（赤い）　（赤すぎて困っている）

目撃性も加わり、単純に《評価》の側面をマークする手段ではないが、＜評価主体＞が有情物でなければならないなど、興味深い制限がある。

また、いわゆる属性形容詞（Aグループの形容詞）の「～シャシトル形」は、「マイナス評価」を表すことが多いというのも興味深い指摘である。

（4）今帰仁（沖縄県）の形容詞の「～サスン形」

工藤編(2002)によると、沖縄の今帰仁方言にも「～サスン」という形があり、話し手の評価的な側面の前景化を形態論的にマークする。

「認識（客観）」　→「評価（主観）」

ウブセン　→ウブサスン

（重い）　（重いと感じる）

また、「固い」にあたる「ハタセン－ハターサスン」の「ハターサスン」の回答に、「他のひとが餅などをかたそうに食べている。石などをかたそうにわっている」との記述があるところを見ると、松橋と同様に他の人がそう感じているのを目撃している意味もありそうである。

この、（3）（4）から、松橋方言・今帰仁方言は、「評価性の前景化」を形態論的にマークする手段を持っており、先ほどの【図3】でいうと、X軸を基準にその上下で形が異なるといえるだろう。

文レベルでの移行関係や、各グループに所属する形容詞の厳密な検討は今後の課題であるが、おおむね、対応をしめした。八亀(2001)では、「時間的限定性」および「評価」を軸として形容詞全体をとらえることが、現代日本語の標準語の記述に有効であることを確認したが、それは日本語の方言の調査・記述にも有効に働く可能性があることは指摘できるのではなかろうか。

しかし、工藤編（2002）の形容詞対応調査でも、「単語レベルの調査」しかまだ行われてはいない。動詞のアスペクト・テンス・ムード体系調査同様に、「同一の理論的枠組

み」に沿った、文レベルでの形容詞（述語文）の調査が必要である。

8. これからの課題

従来、形容詞研究は、動詞研究に比べ課題も少なく単純であるかのように扱われる傾向が少なからずあった。「用言」として「自動詞の一部と同じ」とする扱いも多かったように思われる。

しかし、実際に形容詞を研究対象として、用例を集めてみると、なかなか一筋縄ではいかないことがわかった。その難しさは、「名詞から動詞へ」の連続相の中にあり、第三の品詞として、両端の性質をさまざまな割合で背負っていることから来ている。それは、時間的な性質として表れることもあるし、また、発話主体の主体的な関わり方の様々として表れることもある。

グラデーションをなしている対象を観察・記述するとき、そこに求められる姿勢は、「美しい単純化」ではなく、「渾然一体であることを積極的に認める態度」ではないかと思われる。形容詞研究は、グレーゾーンの記述である。

先に、八亀(2001)で、時間的な側面に関して、その観察・記述を試みた。その際、混乱していた《評価》についての側面に迫るための道筋を樋口（2001）から探ることが本稿の目的の一つであった。

話し手（すなわち発話主体）が現実をどのように言語化するのか、そこに話し手の主体的な関わりが表れている。樋口（2001)の提案する《評価》論は、名詞の《判断》や、動詞述語文のデオンティック・モダリティへの連続性を視野に入れた広がりを持っている。本稿では、樋口(2001)の持つ広い射程の一部にしか言及することができなかった。しかし、樋口(2001)の指摘するとおり、動詞述語文とは異なり、形容詞述語文においては、「評価」という形で、話し手の主体的な関わりがその本質にくいこんで存在している。ここで示された話し手の主体的な関わりのありかたを、今後次のような観点からさらに考えていきたい。

①標準語の《関係》を表す形容詞述語文の具体的記述を通して。
　特に、「評価が行われたことをあらわす表現」の分類を通して。
②方言における形容詞（述語文）の形態論的な分析を通して。
　特に、沖縄や東北などの形容詞についての精密な記述を通して。
③名詞述語文との連続面を通じて。

実際には形容詞が述語として機能している場合を出発点に。

遠い目標ではあるが、少しずつ歩みを進めていきたい。ある程度進んだときに、本稿でわからなかったことがらが、重要な意味を持ってたちあがってくるような予感がしている。

追記：

本論文は「言語学サークル鮎の会（６）」での発表内容を元にしている。勉強会の席上、参加者のみなさまからさまざまなご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
また、本論文は平成13～14年度科学研究補助金（基盤研究（Ｂ）（１））『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』（研究代表者　工藤真由美）の研究成果の一部である。

【注】

1)　「時間的限定性の有無」という術語について、八亀(2001)では「時間的局所限定」と呼んでいたが、今般、「時間的限定性」として定着してきているように思われるので、筆者もこの用語を用いる（「時間的なありか限定」と呼ばれることもある）。ただし、「時間的限界性」との混同には注意していただければ幸いである。
　また、「時間的」とはいえ、単純に時間的なものではなく、テンス・アスペクト・ムード分化の土台にあるものである。詳細については、工藤(2002)を参照いただきたい。

2)　これらとは少し視点の違うものとして、連語論の立場から次の一本があることも忘れてはならない。
　まつもと　ひろたけ（1979）「に格の名詞と形容詞のくみあわせ－連語の記述とその周辺－」『言語の研究』

3)　この樋口（1989）の段階ですでに、評価の主体と対象の切り離しがたい関係が示されているのだが、この論文は形容詞の問題よりもむしろデオンティク・モダリティの問題への発展を視野に入れた記述がなされており、「主体による対象の価値付け」のありさまに興味の中心があるといってもよいだろう。価値付けは「＋（肯定的）・－（否定的）」という二つの方向性をもつものとして整理されている。今日の段階から見ると、その方向性が見えるのだが、発表段階では、従来の評価に対する考え方との違いや新しさがわかりにくかったかもしれない。しかし、逆に言うと、一般的には理解しやすい評価論であった可能性がある。

4)　この論文全体を通して「もっぱら」は「専一に／それだけに」の意味ではなく「主に／主として」の意味で用いられているのではないか、と思われる。筆者の理解不足かもしれない。

5)　例えば、アイヌ語では、「痛い」という自動詞に２種類あって、二つの側面を表し分けている。八亀(2001:46)で引用したものをあげておく。

ku=tekehe arka　※三人称はunmarkedで接辞なし　［私の手－痛い(vi)］
私の　手　痛い
ku=tekehe ku=koni　※一人称主格接辞を伴って　［私－私の手が痛い(vi)］
私の　手　痛い

6)　木村英樹先生のご教示によると、中国語でも同様の現象がみられるという。

【主要参考文献】

荒　正子（1989）「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』　むぎ書房

上村幸雄（1992）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典　第４巻』三省堂

奥田靖雄（1988）「述語の意味的なタイプ」（琉球大学講義プリント　未公刊）

金田章宏（1993）「動詞と形容詞をつなぐもの」『国文学解釈と鑑賞』１月号

金田章宏（2001）『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院

工藤真由美（2002）「現象と本質－方言の文法と標準語の文法－」『日本語文法』2-2

工藤真由美編（2002）『方言における動詞の文法的カテゴリーの総合的研究　報告書No. 1』

佐藤里美（2001）「テクストにおける名詞述語文の機能」『ことばの科学10』むぎ書房

西尾寅弥（1972）『形容詞の意味用法の記述的研究』（国立国語研究所報告44）秀英出版

樋口文彦（1996）「形容詞の分類－状態形容詞と質形容詞－」『ことばの科学7』むぎ書房

樋口文彦（1986）「形容詞からの派生名詞」『教育国語』84

樋口文彦（1989）「評価的な文」『ことばの科学3』むぎ書房

樋口文彦（1994）「使用における形容詞の＜義務性／偶発性＞」『教育国語』2-14

樋口文彦（1995ａ）「発話の中での形容詞の機能」『教育国語』2-17

樋口文彦（1995ｂ）「形容詞について」『教育国語』2-18

樋口文彦（1999）「認識、評価、感情」（言語学研究会夏合宿プリント　未公刊）

樋口文彦（2000）「形容詞の評価的な意味」（言語学研究会夏合宿プリント　未公刊）

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』むぎ書房

まつもと　ひろたけ（1979）「に格の名詞と形容詞のくみあわせ　－連語の記述とその周辺－」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房

村上智美（2001）「形容詞に接続するヨル形式について－熊本県下益郡松橋町の場合－」（第72回日本方言研究会　研究発表原稿集）

村上智美（2002）「熊本方言における「寂ッシャシトル、高シャシトル」という形式について」（国語学会2002年春季大会　於東京都立大学　発表予稿集）

八亀裕美（2001）「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究別冊』１　大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

八亀裕美（2002）「＜短信＞　非動的述語の「継続相相当形式」－青森五所川原方言の場合－」『国語学』208

Bhat, D. N.(1994)　*The Adjectival Category :Criteria for Differentiation and Identification.* John Benjamins Publishing Company. Amsterdam Philadelphia

Givón, T. (2001) *Syntax:An Introduction Vol. I* . John Benjamins Publishing Company. Amsterdam Philadelphia

Hunston and Thompson (ed.)(2000)*Evaluation in Text: Authorial Stance and the Construction of Discourse*. Oxford U.P. New York

Vogel and Comrie (ed.)(2000) *Approaches to the Typology of Word Classes*. Mouton de Gruyter. Berlin New York

Wetzer, H. (1996) *The Typology of Adjectival Predication*. Mouton de Gruyter. Berlin New York

（文学研究科助手）